

---

# トリップ・ライター

むむむぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トリップ・ライター

### 【Zコード】

N7471Q

### 【作者名】

むむむぎ

### 【あらすじ】

本を読むことが好きな青年が、神様に力をもらい、頼まれた探し物を探しながら様々な世界を旅して、その世界の出来事を本にしていく話

主人公は傍観者でありたいと願っているので基本的に物語に入りません。暇でした読んでみてください。

## プロローグ（前書き）

痴女作です。いろいろ設定で書きたいなって、思つた時に書いていくので投稿が不定期ですがよろしくお願いします。

プロローグ

本が閉じられた、その本の題名は『』皮の表紙に装飾や模様が施された分厚い本だ、その本を手に持ち一人の男がこう呟いた

男は20歳ぐらいの青年で、群青の髪と眼を持ち、黒いロングコートに同じく黒いシルクハットを被っている。

「今回の物語はハッピーエンドでしたか。」

ふふふと微笑を浮かべ青年は手に持つ本を倉庫の虫にしまった。

卷之三

その青年の名は 牧宗吾といふ。

春も過ぎ夏になり梅雨の時期に入ろうかといつ時、

その中に机に3・4冊ほどどの本を重ねて、脇に置き、熱心に本を読

「・・・」

۱۵۰ پایه

「・・・・・ペラ

「ふう、さてと、そろそろ帰りましょうか。」

かれこれ5時間は、座つて本を読んでいた青年は時計を見てそう言った。

青年は読んでいた本を、もとあつた棚に戻して馴染みの同書に挨拶をして、入り口へと向かつていった。

先ほど読んでいた本の内容は、勇者だったり、お姫様だったり、ドラゴンだとか、魔法などがある世界を舞台としていて、ドラゴンに攫われたお姫様を、勇者が助けに行くという、王道ファンタジーである。

「ただいま」

自分一人しかいない家の鍵を開けて入り、夕食を食べて、風呂に入り、ベッドに寝転がる。

そういうえば、読みかけの本がありましたね

青年はおもむろにベッドの脇に置いてあつた読みかけの本を手に取り読み始めた。

読んでいるのは、図書館で読んでいたのとは、ちがうファンタジー物である。それだけでなく家の本棚にはびっしりと同じくファンタジー物の小説が詰まっている。

この青年は大のファンタジー小説好きなようだ。

「・・・」パタン

そろそろ、寝ますかね

日付が変わる時間に青年は本を読むのをやめ、電気を消して目を閉

じた。

青年が寝付いたころ唐突に、ベッドの周りが光、光が治ると青年の姿は、ベッドから忽然と消えていた・・・・・。

## プロローグ（後書き）

次もプロローグです。

## プロローグ2

宗吾は今困っていた。なぜ困っているかと云つて、自分置かれている状況が理解できないのである。

ひとつだけわかっていることは、IJIは自分の部屋ではないこと、まあ、これはだれだつて気づくだらう、なぜなら宗吾の田の前には何も無いのだ、四方八方360度、見渡してもあるのは白い空間のみだから。

「一体どうなつていいのじょ。・・・確かに家に帰つて、寝る前に読みかけだつた本を読んで、日付が変わるころには寝たはずです。まさか創作小説にあるみたいに神様とかが出て「起きたか。」！来ちゃつたかも。」「

宗吾が別段慌てもせずに考へてみると突然声が聞こえてきた。声が聞こえる方に振り向いて声の主を見た。

一言で表せば白い玉である。それが宗吾の胸あたりの高さに浮いていた。

「・・・・・」慌てても仕方が無い、今は情報がほしい。

気づかれないように沈黙し内心でどうすればいいか考へていると、白い玉が声を発した。

「私は人間にとつて神様と呼ばれている。お主は突然こんなところに困惑しているだらう、情報がほしいのだらう、何か質問があるのならば答えよう。」

「（思考が読まれてこる…なら、もう直にこわがしょうか）なら、  
ここですか？」

「元々は狭間だ、黄泉と現の狭間」

「（黄泉と現・・・つてことは）俺は死んだのですか？」

「ちがい。お主は現にあつた体」とここに来てこる。」

「では、俺を元々呼んだ目的は何ですか？」

「お主には我の代わりにせつてもらいたことがある、故に元々  
呼んだのだ。」

「それはなんですか？」

「お主にはある探し物をしてもらいたい。」

「なら、何故私なのですか？ほかにもたくさん人はいますよ。」

「お主はおそらく断らないと思つたのだ。探し物といつても元々は  
あるのかわからぬ、故に様々な世界に行つてもらい探しでもらう  
ことになる。お主は叶わぬと思ってた夢があるだろ？探し物を探  
してくれるのならその夢の手助けをしよう。」

「…」

宗吾にはある夢があつたそれは『血の田』で見た物語を本にした  
い。』といつもの、

夢に見つづも非現実的であつたので諦めていた夢だった。

「私にデメリットは無いんですか？」

「ない、我は探し物さえ見つけてくれればよい、我に寿命はない、  
よつて期限もない、それに探し物が見つかった後はお前の自由にす  
るがいい。」

「わかりました。その話、お受けします。」

「感謝する。ではこれよりお主に力を与える。我が探し物がそう簡  
単に見つかるとは思わんから、まずはく不老不死くにしよう、そして様々な世界を

渡る、

く世界渡りの能力く後は可能な限りお主の希望どおりにしよう。」

「では・・・  
ゲート・オブ・バビロン  
王の財宝

(中身は白紙の本や完結した本など)

認識拒絶

(発動すれば誰にも認識されなくなる。誤って攻撃がきても体をす  
り抜ける、

敵意がある物がさわる。攻撃しても無意識に発動する)

魔法

(浮遊、属性魔法く火風水土etcく日常に使える程度(薪に火を  
つけるなど)

主人公適正&amp;世界探索

(その世界の主人公となり得る生命を見つけることができる&m  
p;、その世界の情勢を知ることができる)

をください。」

「問題ない、だがこれでいいのか？ 魔力と力最強とか、時を止めるとか、美形にしてほしいとは頼まないのか？」

「俺はその世界で紡がれる物語に関わるわけではない、その世界の流れを本にしたいだけです、強大な敵を倒すわけでもない。」

そう、彼は、自らが物語の本筋に関わることを認めない、紡がれる物語を鑑賞し傍観し、物語の完結にいたるまでの全てを、あるがままに受け止める、傍観者であることを望む。

「そうか。では力を与えよう。」

神様がそう言つと、目の前に淡い色の光が現れて宗吾の中に入つていった

「これでお主は先ほど言つた力が使えるようになつていい。そして肝心の探し物だが、

それは我の『』だ。よろしく頼む。」

「わかりました。」

この時より、

何百何千何万それこそ無限大にある世界のいくつかに現れ本を書くものが現れる

その物は自らをこう呼ぶ、

トリップ・ライター

## プロローグ2（後書き）

最初に行くのは「コードギアスの世界」です。

## 一〇四の序章（前書き）

サブ主人公登場、コードギアスの世界では主人公ですが。

## 一 つ目の序章

木々が生い茂る森、誰の目にも付かない森の中で、空間が歪みその者が現れた。

Side・宗吾

「IJJが、異世界。」

さて、記念すべき最初の世界に降り立ったわけですが、ん~中々、空間移動は不思議な感覚でしたね、仕込まれる感覚というか、包まれる感覚というか、どうにも口では言い表せないです。

周りを見渡しても、全部森ですか、こちらとしては好都合ですね。さてと、さっそく能力を使ってみましょうか。

ふむ、コードギアスの世界ですか。  
では主人公はつと、

「主人公適正探索、発動。」

数は4人、名前は・・・ルルーシュ・ヴィ・ヴリタニア、ナナリー・  
ヴィ・ブリタニア、  
枢木スザク、そして、  
かんだきがくや神崎 楽也  
なるほど、それでは行きましょうか。

「さあ、どんな物語になるでしょうかね。  
その顔には、樂々は微笑があつた。」

Side・神崎楽也

ふ〜、やっと終わった。

やはり農作業の手伝いは疲れるな。

「おーい、お兄ちゃん」「…………」

「なんだー」

今俺を読んだのは俺の妹の楽奈【ラクナ】と弟の楽太【ガクタ】だ、妹は黒髪短髪で活発な子、弟は俺と同じ坊主頭でいつもヒーローの人物を持っている内気な子だ、

だが俺は10歳過ぎたら、髪を伸ばすつもりだ。

ちなみに家族構成は妹と弟が一人ずつと両親と婆ちゃんがいる。そして、家は農家で米も作っている。

「お父さんが呼んでるよー」

「わかった。裏にいるのか?」

「うん!早く行こ!」「行こう!…………

妹と弟は笑いながらそう言いつと、おもむろに俺の両手を掴んで引っ張つていく。

「おーおーー そんな引っ張るなよ!」

二人は俺にとって、大事な大事な、かわいい兄弟・妹だ。目に入れ

ても痛くない、弟の恋愛については弟の意思を尊重しよう、だが！

妹の相手には、

俺を倒してからこしらーと言ひてやる、絶！対！に！ もこー！シス  
「ノンとか言つな！――

そういうしている内に家の裏に付いた。

「来たか、楽也」

「何のよう?」

親父は何年も農家をやっているからガツチリとした体格でこれまで  
坊主頭である。

「楽也、任せた仕事は終わつたか?」

「うん、終わつた。」

「そりゃ、ならそこにある野菜の種を袋に入れて家に持つて返つてくれ、それで仕事は終わりだ、あとは自由に過ごしていいぞ。」

「わかつた！帰ろうぜ楽奈！楽太！」

俺は妹と弟に笑いかけ言つた。

「うん!」「うん……」

一人も笑つて來たときと同じように俺と手を繋いで家に向かつ。

俺がテンプレで転生してもう8年、

今が2008年8月10日、原作開始まであと2年ぐらいだな。

サクラダイトを手に入れにブリタニアが宣戦布告（といつても皇帝にとつては神根島が目的だらうが）してくるまで、あと2年か・・・。

戦争になつても、家族だけは守らうなきやな。

Side・樂也EN

## 一つ目の序章（後書き）

次に登場人物紹介して、その次に原作キャラ登場します。

## 「コードギアスの世界—登場人物（前書き）

最初の世界は「コードギアス」、好きな作品の一つです。

## コードギアスの世界ー登場人物

名前：神崎 楽也  
がくや

姿；子供のころは坊主頭、途中からぼさぼさ頭、黒髪

能力・ギアス

(高速移動＝自分と自分に触れているものが高速で移動できる、  
デメリットなしON・OFF切り替え可能、暴走なし)

ナイトメア

(見た目SEEDのガイアガンダム、ポテンシャル・紅蓮聖天八極式の2倍、

ラングスピナー、エナジー・ウイング、スーパーヴァリス、  
FF7のクラウドの

合体剣×3本の長剣、2本の短剣、ファースト剣×2で  
超究武神霸斬 ver.5

可能、フレイヤ＝自動生成可能、ガンダムSEEDのミラージュコロイド、

エナジー量；無限、普段は自分の中にあり念じれば出でくる、  
自分が降りたときは勝手に消える)

操縦の才能

(乗り物なら何でも最大限に乗りこなせる。応用力もある)

ギアス無効能力

参考：超究武神霸斬 ver.5は使える

-----

神崎家の人々

父：坊主頭、仏頂面、大柄

母：肩ぐらいまである黒髪を首のあたりでまとめている。

祖父：何事にも落ち着いている

妹：神崎樂奈<sup>らくな</sup>活発、黒髪ショート

弟：神崎樂太<sup>がくた</sup>内氣、坊主頭

## コードギアスの世界—登場人物（後書き）

オリキヤラは彼らしか出しません。

## 幼馴染（前書き）

原作キャラ「登場の回です。」

## 幼馴染

……皇暦2008年、秋……

side・樂也

蒸し暑い夏が過ぎて、実りの秋になつた。

俺の家にとつて、大事な稲刈りの時期だ。家の稲刈りは、家族総出で毎年行つてゐる。

で、今俺が何をしているかといつと、

田んぼの角の稲を鎌で刈つてゐる、これをしないとコンバインが田んぼに入った時に、稲を潰してしまつ。

てゆうか、やつてくれと言われてやつてゐるが、8歳児に鎌を持たせるか、普通

まあ、近くにいるし婆ちゃんがいるし、こっちの方を時々みるから、気にしてくれてゐるとは思つが。

まあ、いいか。ちなみに樂奈と樂太は、任せられる仕事が無いので、母親監視の下、無邪気に走り回つてゐる。父さんは、コンバインに乗つて、稲刈りしてゐる。

俺の貰つた能力に、乗り物は何でも乗りこなせる能力があるけど、さすがに、そのことを言つわけには行かないし、乗せてくれるはずが無い。

そんなこんなで、稲を刈つてゐると、

「お～い！ 楽也 。」「聞き覚えがある声がした。

「なんだ、スザクか、手伝いにも着てくれたのか？」  
そう、声を掛けてきたのは、コードギアスの主人公ルルーシュの親友であり、敵でもある  
枢木スザクその人である。

「そうだぜ、今日は楽屋の家つて稻刈りじゃん。家中に暇だから、こっちに来た。」

「そりが、なら父さんのところに言つて、何やればいいか聞いて来いよ。」

「おう！」

何故、スザクと親しいのかだが。家のお得意先が、枢木家だつたりする。

親同士が知り合いで、前に枢木家に作物を届けに行つた時に知り合つた。

今では親友と言える位の間柄だ。

太陽が真上に差し掛かつたぐらいで、母さんの呼ぶ声が聞こえた、どうやら飯らしいな。

「行こうぜ、スザク！」

「おうー。」

言つてみると、楽奈と楽太が昼飯の準備をしていた。ブルーシートの上に並べられた皿の上には、大量のおにぎり。

おにぎりっていこよな、ちなみに、俺は具なしで、塩だけで握ったやつが好きだ。

「スザクさん！」

楽奈が、一緒に来たスザクを見て、うれしそうに顔を張り上げる。

「おっす、里奈、それに楽也も」

「へんてつけ…」。

俺とも親しいスザクは、当たり前に俺の家族とも親しい。

よく家に来るので、飯を一緒に食べるのもよくある。

そして、俺とスザクが一緒に口じを食べる時、俺達にとつての戦争が始まる…

「……………」

「これもうこーー。」

「てめ！スザクそれは俺のだーー！」

「早い者勝ちだー。」

「畜生す、なら俺はこれ貰つばー。」

「……それは俺が食おうと思つてたおにぎりだ、返せー。」

「早い者勝ちなんだよな～～」

これが俺とスザクの『戦争』、言い換えれば、『食い意地張ったバカどもの食い物争奪戦』である。

だが、この一人、スザクは、自分と樂也の前から、樂也は、スザクと自分の前にある

おにぎりしか手を出していないあたり、根っこは優しい奴等である。そしてこの戦争？毎度毎度いつも同じ終わり方をする。

「一人とも喧嘩しちゃダメ…………！」

「――――」

飯も食べ終わり、午後の作業は午前中にやつた、角を刈つた田んぼの稻をコンバインで刈るだけだからやることが無いので、俺達は山で遊ぶことにした。

山は、今だ紅葉も始まらずに木が生い茂つていた。

そして俺達は様々なことをして遊んだ。木登り、虫取り、木の実探し、鬼ごっこ、かくれんぼ、山の池での水切り、etc。

・・最近、肉体年齢に引っ張られているのか、子供みたいに（体は子供だが）無邪氣

遊ぶようになつていて。まあ、それがどうこう言つことではないけど遊んでいる途中にもいろいろあつた。

樂太が木登りで上りきれずに落ちたり、樂奈が、虫が苦手なのを知

つていて近づけてくるスザクを俺が蹴り倒し、その後喧嘩になつたり、俺が、足を滑らせて池に落ちたり、楽太が、かくれんぼで俺を見つけられずに泣き、慌てて出て行つたら「見つけた！」と元気に言われたり、樂太の嘘鳴きに乗つてしまつて「やられた……」つと、落ち込んでいる俺をスザクが爆笑してしたり、その俺を樂奈が慰めてくれたりとかな。

空が綺麗なアカネ色になり、空の色であたり一面が赤みがかつた道を、俺とスザクはそれぞれ、樂奈と樂太を背負つて歩いていた。俺もスザクも、道場で鍛えてもらつているから、そんなに苦でもない。

「今日も遊んだな～」

「服も泥だらけだしな、」

「お前の家は、そこんどこ、気にしないだらうが、家は家政婦のオバさんが煩くて、たまたもんじやねーよ」

「じゃあ、もつと大人しく遊ぶか?」

「冗談!大人しくなんて俺の性に合わない!」

「・・・そうだな!（やつぱりアーネとは全然違うよな、それだけ変わる要因があつたんだろうけど・・・）」

それから、家に着くまで、他愛も無い話を俺達はしていた。

家に着くと、母さんが俺達の姿を見て、呆れたように、でも穏やか

に微笑み

風呂に入つてきなさい、つと言つた。

スザクも、時々一緒に入るのだが、今日はこのまま帰ると言つた。家政婦のおばさんに見つからないように、こつそり帰ると言つているが、未だに帰りきたとということはないらしい

俺は楽奈と楽也を起こして一緒に風呂に入った、

あれだけ遊んだのにまだ元気が有り余っているよつて、はしゃぐ二人を見て俺は言つた。

「楽奈、楽太、今日楽しかったか？」

「うんー」 「うん

「やうか！」

楽奈と楽太の言葉を聞いて、自然と頬が緩む。やつぱり家族つていいよなー

「なあ？一人とも」

「何？」 「？？」

「もし、この国が攻め込まれて、今の生活を捨てなきゃだめになつたら、どうする？」

「お兄ちゃんが何言つてるのか、わからなによ」 「うん…」

「もし、俺たち家族の所に、こわい人達が着て、ひどいことを、しようしたらどうする？」

「お巡りさんに助けてもらひうー。」「僕もそひ思ひ…」

一人の言葉に少し睡然としたが、すぐに取り繕つて言った。

「せうか！なら助けてもらひえるよひ、いい子にしてなきやな！」

「うんー。」「うん…。」

妹と弟は無邪気に笑っていた。

みんなが寝静まつてから、自分のベッドの中で、楽せはひとり考えていた。

あと一年もすれば、ルルーシュ達がやつてくるはずだ、そうしたら、もう時間が無い。

ブリタニアの日本侵攻は、止められる確立が少ない。可能性として、ギアス卿団と神根島の破壊、あるいは皇帝と／＼・暗殺、だがどちらも俺には無理だ、

ギアスを使えば一晩で戻つてくることも可能だが、俺のギアスは高速移動、可能な限り速くしても、レーダーには引っかかる。ミラージュコロイドがあるが、あれじやあ高速で移動できないから、一晩で戻つて来れない。

たとえ、それができたとしても、日本にはサクラダイトがある。ブリタニアが攻め込む理由はそれだけで足りる。

となると、後の残された道は戦争中、戦後の日本で生き残ることだ。ブリタニアがせめて来た時にどう生き残るか。

家は捨てるしかないか、ここは自然が多くて町ともそれなりに離れてはいるが、近くに富士山があり、そこにはサクラダイト採掘所がある。戦争になれば、真っ先に狙われるような場所だ。アニメだと第一話で、その描写が合つたから、その近所のここも危険だ。

どうすればいい？・・・どうすれば家族を守れる？・・・・・

そういうえば、転生した直後はどうやって原作に入しようかとか、原作崩壊してやるって意気込んでたな。

俺にとって、コードギアスは綺麗な終わり方をしたと思う、けど、納得するかは別問題だ。

ルルーシュが死ぬことは納得したくない。コード継承していく欲しいと思う、

それ以前に黒の騎士団の裏切りがなければ、ルルーシュがゼロレクイエムで死ぬことも無かつたと思う。

ルルーシュがギアスとブリタニアの皇子ってことを黒の騎士団員に黙っていたとはいえないのに簡単に捨てるのはひどいだろう。

確かにジェレミア卿が加わったり、ギアス卿団の人間を殲滅したりナナリー優先して騎士団を危険な目にしたけど、ゼロだって中身は

人間だ、それに敵であるシユナイゼルの言葉を信じてゼロを裏切ることか無いだろ。

敵からの情報なんて、敵側に都合がいいように編集してゐるはずだ。まあ、シユナイゼルだけじゃなくて、扇もヴィレッタの言葉を信じて裏切ることに賛成してたのもあるだろうけどな。

ゼロが進む道の途中には日本開放もあつて、それを成すだけの力量を持ち、成果も上げているのに、それにもかかわらず自分達のリーダーを捨てた。

俺は黒の騎士団が嫌いだ。だからルルーシュが裏切られないために、ルルーシュが死なないために原作に介入しようと思つてた。

それなのに、その気持ちが、年々、家族と触れ合つて、家族をどう守つていくかに変わつていった……。

孤児院の仲間達が家族ではないとは言わないが、生前で友達が血の繋がつた家族は

大切だつて言つた意味が、わかつた気がする

樂也の生前は、所謂、天涯孤独というやつである。孤児院で育ち、一人身のまま、事故によつて死んでしまつた。樂屋にとつて孤児院の養父や仲間が家族ではないとは言わないが、今の家族は、血の繫がつた正真正銘の家族であり、家族に飢えていた樂也にとつて今の家族が、大切なのは、しかたがないことであるのかもしけない。

「とにかく、やれることをやつしていくか！」

て言つても俺8歳だからな。やれる」とは限られてくる。

「レーベン」

「…」（起しあつたか。）

「みん・・な、ずつと・・・・一緒・・だよ・・・ふみゅ〜・・・・」  
・ 「う・ん」  
「・」

「まつ（寝言か、）」

樂也は、  
樂奈の頭と、  
樂太の背中を撫でる

今も俺には、ルルーシュを助けたいと言つ思ひはある、だが家族を守りたいと思つてゐる自分もいる。

これからどうなるのかはわからない。もしかしたらルルーシュが日本に来ないかもしれないし、戦争も起きないかもしれない。

将来の俺にとって、ルルーシュの命か、家族と一緒に居ることのどちらが大切になっているのかもわからない。けど今この時は、家族のためにこう言おう。

「ああ、

すつと一緒にさる。

## 幼馴染（後書き）

スザク登場、最初は主人公交えた子供時代を書いていこうかと思います。性格違うかも知れませんが、よろしくお願いします。

## 人質の皇族（前書き）

原作\_一人目のキャラと遭遇します。

## 人質の皇族

…………2010年、初夏……

s.i.d.e.・樂也

俺はこの一年半、家族と過ごし、スザクと樂奈と樂太と一緒に遊ぶ日常を送っている。そんな時に、稀に見る不機嫌さを露さずここちに来るスザクを見た。

「どうしたの？スザク、見るからに不機嫌そうだけど」

スザクが不機嫌になるのはよくあることだ、それでいつも俺が相手をして

喧嘩に発展しあるがお互いを罵り合って、喧嘩する。そして、しばらくすると里奈が来て止められることがいつも流れ。

不思議なのは、里奈が近くに居なこときに喧嘩しても、

どうやって知ったかは知らないが、いつもやつてくれるのだから。

今回も同じだろ？と思つて構えていると、

「今度、家にブリタニアの皇子が来るんだってや。」  
俺は田を見開いた。ついに来るのが、ルルーシュがー。

「皇子ー？名前は？」

「ルルーシュって奴とナナリーって奴、やつぱり、あの二人か・・・

「それで？お前が怒ってる理由はそれだけじゃないだろ？」

スザクは、ブリタニアが嫌いなので、不機嫌になるのはわかるが、ここまで不機嫌にはならない、理由としては、よほどむかつく奴なのか、

それとも自分に関係することか。

俺の予想が正しければ、俺達が遊ぶのに使っていた土蔵がルルーシュとナナリーの住む場所になるはず。おおらかそのことについても怒っているんだろう。

「俺達が遊んでた土蔵があるだろ、そこに住むことになつたんだよ！…あ～もうなんどよりにもよつて、あこなんだよ…！」

そこからはもうスザクの言葉は止まらなかつた。結局、その後に喧嘩になり、さらに発展して喧嘩になつたが、いつもビッグツヤつて来た樂奈に止められた。

その日から、数日後、予定通り、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアとナナリー・ヴィ・ブリタニアは日本にやってきた

ルルーシュ達が来た日の翌々日に俺は、スザクのところを、訪れた

「おっす、スザク・・どうした？元気ないな。」

田に見えて落ち込んではいないが、幼馴染としては、スザクの気持ちの沈みようはわかつた。

好きな女子に振られた？ ちがうな、そんなの居ないことを俺は知っている。

楽奈にちゅつかいだして、拒絶された？ それだつたら覚悟しろよ  
スザク！

ゲンブさん怒られた？ これも違うな、それならスザクはいんに  
落ち込まない。

となると、ルルーシュ達と何かあつたんだろうな。

「実は・・・」

話を要約すると、田の見えないナナリーのためにルルーシュが古ぼけた土蔵のことを、立派な屋敷と言つて、それにスザクが感情的になつてナナリーの前で本当のことをばらした。その後、ルルーシュに殴りかかつて、ナナリーに止められて田が見えないと知り、ごめん、と言つて蔵から飛び出した、と。

なるほど、スザクはナナリー罪悪感を感じてんのか。

「それで、お前はどうしたいんだ。」

「別に仲良くなりたいわけじゃない、だからこのままや。」

「やうか、なら、その顔どうにかしろ。そんなんじゃ一緒に遊んで

ても楽しくないぞ。」「

「・・・そーだなー! やめやめ、こんなのは俺の性に合わん!..」

「そうそう、それでこソスザクだ! じゃあ行こづか、里奈と樂太も待つてる!..」

「おう!..」

s.i.d.e.・樂也END

:.:.:.:数日後:.:.:.

s.i.d.e.・スザク

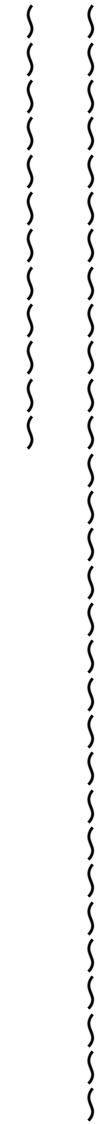
物置倉の前に洗濯物がある。あいつらの物だ。そこはこの前まで、俺達四人の場所だったのに、里奈と樂太は残念そうにして、心なしか楽也もそうだった。

「どいてくれないか?..」

その声に振り返ると、後ろには、あいつがいた、一週間前から家にいる、ブリタニアの皇子 ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが立っていた。

「ナナリーの分を干したいんだ、早くしないと口が陰ってしまう。こソ使ってはいけなかつたかな? それとも、僕に何か用事とか?..」

「あるわけないだろ、用なんて、俺は忙しいんだ！」



「バシン！！」

「うわーーー！」

「どうしたーー！　スザク君、集中が切れただぞ」

「すみません・・・。藤堂先生」

そうだった。俺は藤堂先生の所に稽古に来てるんだった。

「珍しいな、スザクが集中を切らすなんて」

俺と一緒に稽古に来てる楽也がそつと囁いてくる。

先生は軍隊の仕事を抜けて懇々教えに来てくれるんだから、しつかりやらないと。

剣術で見つとも無いいまねは藤堂先生にも、楽也にも見せられない。

「今日はもう四回目だぞ、気になるのかブリタニアの皇子が？」

「別に……あんな弱っちーのー。」

「素直じゃないな」と笑いながら楽也が言いつぶへる、「うむーー！」

「もう喧嘩したのか、確か君と楽也君とは同じ年だったね、いい友

達になれるといいな

「あやか！あんな恩知らず、あいつ、父さんが付けたお手伝いさん、全部断っちゃたんだ  
食事だつてちやんと作って作って作ってやつたら、一口も手をつけなくて、」

「毒殺でも警戒してこるのか？」

「父ちゃんがそんな事するかよー。ブリキじゃあるまいし」

「いや、多分だけあって、日本もブリタニアも同じなん  
じゃないか？」

「はあー。日本とブリキが同じ、何言つてんだよー。楽也」

「日本にしろ、ブリタニアにしろ、あいつは同じくらうに信用できな  
いだろ、ブリタニアには捨てる同然の扱いで日本に送られたって聞  
いたし、日本は敵国だしな」

「そうだな、スザク君、楽也君、私は軍人だができれば戦いたくな  
いと思つてこる。」

「どうして、藤堂先生ならブリキどもに負けないでしょー。」

「戦わない方が楽だらう、意外と急け者なんだよ、私は。さて今  
日の稽古はそろそろやめにしよう。一人とも汗拭いて風邪を引  
かないよ！」

藤堂先生なんか変だな、父さんも最近東京に行きつ放しだし、どう

したんだろう？

帰り道に、俺は樂也に、自分の疑問を言つてみた。そしたら  
「多分だけど、日本と他国との関係が緊迫してゐんじゃないか？そ  
うなれば、やらなきやならないこともあるだろ？」

つて言つた。そうだよな、父さんや藤堂先生も大変なんだよな。  
ふと、気が付くと樂也が立ち止まつていてるのがわかつた。その視線  
の先を見ると、

ルルーシュがいた。だけど、そこにはルルーシュ以外にも、町の子  
供達と、父さんが付けたSPもいた。

そこでルルーシュは町の子供に、殴られていた、けど反撃しないで  
ただうずくまって耐えていただけだった。

弱いくせに町なんかに下りて来るからだ、でもなんで、SPは何も  
しないんだろう？

俺は抵抗しないルルーシュにも、弱いものいじめなんてしてくる奴ら  
にも腹が立つてきた。止めに行こうとした時

「スザク、俺はアッシュ助けに行くけど、お前はどうする？」

樂屋がそう言つた。

「当然ー皇子は嫌いだ、だけど弱いものいじめはもつと嫌いだ！」

「じゃあ行こうぜー。」

「やめろーー。」

その後、町の子供達は、俺が榎木家の子供だとわかると、すぐに逃げて言った。このあたりで榎木の名前は絶対だ。

「お前達、なんで助けなかつた？ボディーガードだろ？」

SAYAに問い合わせたけどSAYAは何も言わない。

「おやらく違つて、スザク」

樂也そういつた、けど違つてどうゆうことだ？

「監視だと思つた、そりだな、えーとなんて呼べば言つ？」

そつまつてルルーシュに答えを求める

「好きによべばいい。それと、君の言つてることは正しいよ、彼らは僕が勝手に逃げたり、死なないよ、つにするただの見張りなんだ。」

「

「そんなー。」

「君らはどつして助けたんだ、僕はブリタニア人なのに、元の

「ブリタニアは嫌いだ！けど弱いものいじめはもっと嫌いなんだ！」

「……」

樂也も頷く。

「弱いもの、か、ふつ、そうだな」

「何がおかしい

「別に」

「嘘だ今笑つただろう」

「自分のことだよ笑つたのは、自嘲つてやつ」

「自嘲？」

「負け犬の笑いだよ、そつやつて心を守つてゐる、どいてくれない  
か？君は僕のポイントカードを踏んでる」

そういつて、ルルーシュは、足跡が付いたポイントカードを大事そ  
うに抱えて、

あたりに散らばつた小銭を拾つてゐる。

途中、樂也が手伝つよつて言つたけど、ルルーシュは断つた、

ルルーシュがポイントカードを持ち小銭を拾つ姿は最低にかつて悪  
くて、いじましかつた。俺はそこで衝動に任せて言つた。

「弱つちいくせに町に下りるからだ、意地を張らないで、家の食事  
を食えよ！毒なんか入れてないぞ！」

「知ってる」

「なら食えよー!」

「僕は生きるんだ、自分の力で生きる、死人にはならない僕もナナリーも」

それだけ言つとルルーシュは片足を引きずりながら歩き始めた  
生きる?当たり前だろ、生きてるから、生きてるんだわ!、何言つてんだあいつ

「なんか、トラウマみたいなことでもあるのかな?」

樂也の言葉も耳に入らず、なぜか俺は自分が無性に恥ずかしかった。

## 人質の皇族（後書き）

### ルルーシュ登場の回

作者は一応、全部ではないですがピクチャードラマは、見てます。主人公の知識はアニメを見た程度です。

それではこれで。

## 新たな友達

side・樂也

最近スザクからルルーシュの話をよく聞く、口では興味ないと言つておきながら、ルルーシュの話をよくするあたり、無意識に気になつてゐるんだろう。これを言つたら怒ることは目に見えているから言わないけどね。

ルルーシュ達が日本に来て半月経つた今日、俺は、収穫した野菜を届けに枢木家に来ている。

父さんは野菜を届けて、ゲンブさんと一緒に話した後、俺に遅くならないように言つて帰つていった。

俺はいつもどうりスザクと遊んでたが、蔵の前に来るとスザクが立ち止まって、蔵を見上げた。

何か深く考えているみたいだな。

なら待つか、大方ルルーシュのことだらうと思い。静かに待つていると、

後ろに近づいてくる気配を感じた。車輪の音が聞こえてるからナナリーだらう。

・・・・・話してみたいし、声を掛けてみるか。

「」

「」

ナナリーだけでなく、スザクまでも驚いたらしい、てかドンだけ考  
えることに没頭してんだよ。

「……ですか？」

ナナリーにはやつぱり警戒されている、まあ当たり前か

「俺の名前は、神崎樂也つていうんだ、それで俺の隣にいる奴は枢  
木スザクだよ

「スザク・・・あ！殴るのですか私を？抵抗はしません。でも覚え  
ていて下さい、私の心までは殴れないと言うことを。」

「君は「何をしている！…」・・・ルルーシュ」

「大丈夫かナナリー、こいつらに何かされたのか？」

「ちがう！俺達は」

「僕の留守を狙うだなんて日本人らしいな」

「なんだと！強盗のブリキ野郎が！」

「強盗？父親にそう言われたのか？」

「ちがうのか！」

「いや違わない。ブリタニアはそういう国だ、軍事力を背景にした  
侵略行為、威圧外交、戦利主義、まったく最低の国だよ」

「お前・・」

「言つておくれが日本だって違ひは無い、中華連邦とブリタニアの睨み合いを利用して金稼ぎ、サクラダイバーの採掘源を利用した一重外交、貧困地域の経済支配、中々する賢い国だよ日本は」

「ふざけるなー！日本はそんな国じゃない！」

スザクは腕を振り上げた、

「殴るのか？同じだなブリタニアのやり口と」

「うるさい」

スザクはそのまま、腕を振り下ろ

なかつた。いや性格にはできなかつた。スザクの振り下ろされようとした手は、樂也によつて止められていた。

「落ち着けスザク！まずはその腕を引っ込めろ、ブリタニアと一緒になんて言われたくないだろ」

そういうとスザクは腕を引いてくれたが、言わたることが悔しいのか、スザクは、走り去つてしまつた。俺はとりあえず誤解を解く努力をしようつかな。

「えへと、まずは誤解を解いておこうと思つ  
そういうとルルーシュは俺を睨んできた

「誤解だつて？」

「そう誤解、まず俺達は別に君の妹を傷つけようとしてここに来たわけじゃないよ」

「それを信じると?」

「そこは信じて貰うしかないかな、俺もスザクも、弱いものいじめは嫌いだつて、この前町で言つたじゃないか、」

「・・・・」

これはまだ疑つてゐるな。

これ以上はいても仕方ない。しスザクを追うか。

「それじゃあ、おれはスザクの後、追つから、じゃあな！」  
さて、スザクはどうこいつたんだろうか？

日が傾いた、一体どこにいるんだ？スザクの奴、最初に枢木神社を回つてその後に回りを探したがスザクの姿はどこにもいなかつた。  
いつたいどこの・・・もう一度枢木神社をみていかつたら帰るわ。

枢木神社に着くとなにやら、スザクが走り回つていた、探したぞつと言おうと思つたら、  
なにせら必死に探していたので、ビラしたんだ？って聞いてみた。  
そしたら、

ナナリーとルルーシュがいないらしい。

一緒に探しながら事情聞くと、俺は出会つてから初めてゲンブさんに怒りを覚えた、

確かに政略結婚は為政者にとつては大切なことだろうが、一人の兄としてそれは許せることじやない。

俺は必死になつて探した、そして見つけた榎木神社に続く長い階段の途中にある大破した車椅子を。

俺は驚かずには居られなかつた、彼女が危険な目に合つてゐる、

おやうくルルーシュは俺達異常に必死になつて探してゐるだらう、

もしくは一緒に逃げてゐるかだが。

もし里奈が40以上歳が離れたおつさんと結婚することになつたら、俺はきっと耐えられない。

里奈には自由に恋愛してほしい（だが、その恋愛の先には俺と言つ壁があるがな！）と思つ。

俺がそう考えていると、脇の茂みから声がした。

「ナナリー！ナナリーなのか！？」

茂みから出でてきたルルーシュの顔には涙の後があつた。おいやつとまで、ルルーシュがナナリーと一緒にないつてことは…

「ルルーシュになくなつたのか？あの子が

スザクが問う、だがルルーシュは目を伏せていた。

「関係ない君達には」

「居なくなつたんだな」

「だつたら、どうだつて言つんだ」

「それは、一緒に探して「手伝つてほしくない！日本人には、君だつてブリタニアが嫌いだろう、声は俺達兄弟の問題だ」

俺はその発言を聞いたとき自分の体の中で何かが切れる音がした。

「ふざけるな！……」

その言葉とともに、俺はルルーシュの胸倉お掴む

「手伝つて欲しくないだと、ならお前にとつてあの子への愛情はその程度なのか！……」

そう言った俺の声は自分の普段の声とは違う低い声だつたが今の俺には関係ない！

今は「いつを！……

「そんなわけない！」

「じゃあなんでお前は自分の妹が危険な目に合つてるかもしけないのに、お前は自分のプライドを優先させるよつこといつてるんだ

！…血の繋がった兄弟、姉妹に対する思いの中に国の価値観なんてものは入らない！！日本もブリタニアも関係ない！！妹を助けたいなら自分のプライドも価値観もかなぐり捨てて助けようと努力しろ！！俺には妹と弟が居る！！お前が妹に対する以上の愛情は持つてる！！俺は二人を大切に思う兄として…お前のさつきの発言は見過ごせない！！

そこまで、一気にまくし立てるど、ルルーシュの頬を思いつきりぶん殴る。

ルルーシュは唖然とした表情でこっちに顔を向ける。

そこに俺とは違う理由だが怒っているスザクが言う

「俺には兄弟なんて居ない！！けど、日本人もブリタニア人も関係ない俺が探したいから探すんだ！！枢木スザクは日本男児だ！！助けたい人を助けるのに…やりたいことをやるのに理由なんかいるもんか！！」

「探すぞ…スザク…！」

「ああ…！」

「また、ナナリーは僕が守るんだ！  
だれの手も借りない大人の助けも日本人の助けも「「黙れ…！」」  
！」

「人の手も借りずに一人でやろうなんて思い上がるな…！」生意気なんだよ…！」

探し回っていると、以前、四人で作った秘密基地の近くだと気づいた。

だめもとで秘密基地の穴を覗くと

「ナナリー！スザクこっちだー！」

「見つけたか楽也！」

「ああ！ナナリー大丈夫か！？」

俺は必死にナナリーに呼びかけた。すると

「うう…ん、ん？あれここは？」

「よかつた！起きたのか」

「怪我は無いか？」

「え？この声、確かスザクさんと楽也さん？　はい体は大丈夫ですけど」

「覚えててくれたんだ、ナナリー」

「怪我はないみたいだな、とにかく何でここにいるんだ？」

「ここに落ちてきを失ったみたいです。あの、ここはナンですか？」

「ここは、俺達+二人の秘密基地なんだ」

「四人で作って、非常食や武器もあるんだ。」

「そ、うなんどうか…す、ごいです！」

ナナリーは無邪気に笑った。その笑顔に俺とスザクは緊張の糸が切れ、その場に座った。

そこから始まるのは、なんてことはない子供同士の遊びだ、他愛もない話をしたり、日本の遊びでナナリーができるものをやつたりした。

そうしている内に、誰からともなく、笑い始めて、三人で笑つている所にルルーシュが来た。

そのルルーシュの顔には、安心となぜか驚きがあった。

「ナナリー、さつき笑つてた？」

「えー…ええ」

「どうして、ずっと笑わなかつたのに」

「だつて、スザクさんと、楽也さんが、笑うから」

「え！」

「三人で遊んでいる内に一人が笑つていって、それにつられてしまつて」

「笑う…」

「気づいてなかつたのか？」

「ルルーシュ。お前、全然笑つてなかつたぞ」

そう、ルルーシュが笑つてゐるところを、俺達はまだ見たことがない。

「！！（笑わなくなつてたのは、ナナリーだけじゃない、僕も・・・負けた、ナナリーを見つけることもできずに、笑わせることもできなかつた・・・・・・そうだ！ナナリーを見つけてもらつたんだ、お礼言わなくちや、ありがとう）」

「あ、「ルルーシュ！」」

スザクはルルーシュの言葉を遮つた、そして

「『めん! 始めてあつた時お前を殴つた』と、だから『めん!』

俺も続けて言う

「……なんでそんな簡単に、誤るんだよ」

「だつて、お前すげーじゃん。ナナリーから話聞いたよ、お前のお母さんの」とも兄弟のことも、それなのに今までたつた一人で妹守つててさ、知らなかつたとはいえ俺、お前に無責任な」と言つちまつてさ・・・」

スザクはそついつて泣きやつた、とこつか泣いてる顔を下げた、俺も言わなきゃな

「ルルーシュ、俺は今まで、お前の境遇を勝手に、創造だけで判断して判つた気になつていた。

でもお前の話をナナリーから聞いて、周りが信用できない理由はもつと深いと知った。

だから、ごめん、俺の判断はお前にとってとても無粋なものだった、だから」「めん！」

そう言ひて、俺は頭を下げる。

「二人共……」

「ぐすつ・ルルーシュ、お前もこいつちは入れよー。」

「おい、引っ張るなよー…………意外と広いんだな」

「まじふた閉めて」

蓋がしまった。この秘密基地は、蓋を閉めると不思議と暖かい

「暖かいな」

「はい、とっても暖かいですー。」

「俺の力作だぜー！」

「俺達の、だろ」

**新たな友達（後書き）**

主人公怒り爆発の回&仲直りの回

## 僕たちの日常

side・樂也

あれから、俺達はルルーシュ達と友達になつた。

あの日の後日、樂奈と樂太にルルーシュ達を紹介した時に驚かれたが、

今ではナナリーと樂奈は同じ年ということもあって、とても仲がいい。

もちろん、樂太も俺もスザクもルルーシュとは親友と呼べる間柄になつた。

両親にも、このことを言った。いやな顔をされるかと思つたけど、そんなことはなかつた、けどよくもないみたい。

そうそう、ナナリーとゲンブさんの政略結婚の話ははなくなつた。

そのことについて、俺とスザクがルルーシュに何したのか尋ねたが、ヒミツといわれた。

最近は、いつもの4人に加わり、6人でいつも遊ぶ。

遊んでいると、ルルーシュの体力のなさが改めて実感された、

鬼ごっこ（ナナリー休憩中）で鬼になると、最初は誰も捕まらなかつたし、

木登り（ナナリー見学中）ルルーシュはつねにビリ

体力使わないかくれんぼでも、地の利で日本組みの勝利

などなど、運動系では、まるっきりだめだった。まあ、最近の鬼ごつこと、かくれんぼについてはルルーシュが頭を使って、勝率が、  
頭脳組：体力組＝3：7 になっている。

逆に、頭を使うことに関しては、ルルージュがダントツで、一番だけつた。

ルルーシュが、将棋をしてみたいと言つてきたとき、ルールを知らないスザクの代わりに、

相手したけど今のところ、勝ち星はない。

そして、また一日が始まり、みんなで集まって、どう遊ぶか決めたら

今日は土蔵の野中で人生ゲームをすることになった。人生ゲームといつても、

家を手に入れる、とかが無い単純な奴だ、1回休みとか、2進むとか、

「やつたぜ、3だ！」

スザクが、声を張り上げた

「えーと、1・2・3つと、おっしゃーも「3進だつて。1・2・3つと、ほらルルーシュの番だぞ、」

「わかつた、・・・よしー6だ、1・2・3・4・5・6「わー一回休み!」

「お兄様、休んじやうんですか?」

「そうだよ、ナナリー、」

「残念だつたな、ルルーシュ、運が無くて。じゃあ、次は俺だな、ほいっと・・・2か、

1・2、げー!ビリの人と、同じところまで下がるー・ビリつてルルーシュじゃん!しかも二回休みつて・・・・・・」

三位から一気にビリ。そしてルルーシュは五位から大分離されていく。

「僕より運が無いな、君は

ルルーシュの奴、ちょっとした優越感に浸りやがってー、お前も俺と同じところなんだぞ!と同じところなんだぞ!わかってるのか?

「楽也だつせー!」

「ひぬせいぞー!スザク!」

「次僕の番……」

俺達のやり取りをスルーして、ヒーロー人形をコマにしている楽太がサイコロを振った。

その目、は6。

「1・2・3・4・5・6、あ、1位の人追いつけだつて……」

・・・・なんだ、この俺との差は・・・・

「私、追いつかれちゃうんですか?」

ナナリーがそういうてくる。はっきり言えばナナリーは今までダントツで一位だった、一位とビリの差は全100マスの中で、56マス、普通ここまで差が付くか?・・・

「次は私の番だね!それ、・・・・4かく、1・2・3・4、1進むだって、次ナナリーちゃんの番!」

うん、楽奈は普通だね、普通で居てくれて、兄ちゃんはうれしいぞ!

「はい!それじゃあ、いきますね、それ

そつじて出た目は、1だ。だが

「ナナリーちゃん、上がりだよ!」

そう、ナナリーの居た場所は、アガリマスのひとつ前、つまり何を出しても上がりだった。

「ナナリーに1位は取られたけど、まだだ、まだ2位が……いや3位が残っている！」

ルルーシュがそういう、確かに2位はもう無理だな、

「ルルーシュと楽也の場所から俺を越せない、俺のアガリになるぜ」

ふつ、それは違うぞスザク。

「スザク、物事には、予期せぬアクシデントが付き物だ、絶対は無い！俺はスザクを越す！」

そこで待つていろ”兎と亀”の亀のように…」

「そうだ、覚悟しろよスザク、上がつていいのは！上がるられる覚悟のある奴だけだ！」

だから待つていろ亀のようにな…」

「いや！俺は鳥になる…紅蓮天翔…………！」

なぜ知ってる！

「ふふふ、お兄様楽しそう。」

「お兄ちゃんも、意地張っちゃって、」「スザクもね……」

そうして、俺達6人は、笑い合い、語り合い、また次の遊びをする。それが、最近の日常、平穏が壊れる前の、かけがえの無い、とても・

・・大切な日常

今日の、ある晴れた、夏の日の、田付は

皇曆2010年7月10日、

後、およそ一ヶ月

ブリタニアの日本侵攻まで、

## 僕たちの日常2

s.i.d.e.・樂也

「おかえりなさい、兄様」

「た、ただいま、ナナリー」

ナナリーは兄の帰宅にそう言つ。普通だ。この声をかけられるのが  
のがルルーシュならな。

今、声をかけられているのはスザクだ。実兄のルルーシュはスザク  
にさつきから鋭い視線を送つている。

事の発端は楽奈とナナリーの言葉から始まった。

……30分前……

「今日は何して遊ぶ?」

俺は6人に向かつてそう言つ。

「すゞるく、おにじっこ、かくれんぼ、木登り、虫取り……。  
最近こればっかりだな。ほかの遊びしようぜ」

「僕も賛成だ、スザク、樂也、日本の遊びで何かないか?」

「はーいーおままでじよひー。」

「えへやだよ~、そんな女っぽい遊び」

スザクの反論、ルルーシュも少し眉を寄せている。

「ダメ……ですか？」

「ここでナナリーの上目使い！ 楽奈も混ざって一人分の罪悪感が俺達にのしかかる。」

もはや男子陣に拒否といつ選択肢は消えた。

「じゃあ、クジで役を決めるぞ。順番に取ってくれ」

そして、冒頭に戻る。クジの決定により、ナナリーは妹役、スザクはその兄役である。

「た、ただいま、ナナリー」

テンパってるなスザク。それとルルーシュいい加減にりむのやめたらどうだ。

「おかえりスザク、ご飯はもう少し待ってねー後、洗濯物は出しておいてねー」

樂奈ー（母役）もノリノリだな。そんなに楽しいのか、おまめ！」とつて。

「わかつた」

スザクは洗濯物を出すふりをして、樂奈はおもむりやの鍋に砂を入れてかき混ぜていく。

「ただいま。ナナリー、樂奈」

ルルーシュー（父親役）が帰ってきた。

スザクの名前を出さないのは、ワザとか？ワザとだな確實に。

「おかえりなれー。貴方　お風呂にさぬ？」「飯にする？それとも、わ・た・し？」

「ふーーー。ちよつとまでーーー。樂奈そんな言葉どいで覚えたーーー。お兄ちゃんは許しませんよーーー」

「なつーーー。樂奈ー。前ーーーはともかく、最後のはなんだー！僕は選ばないぞーーー。絶対選んでなるものかーーー」

ほらルルーシュもテンパってるよ、もつーーーいつたい誰が教えたんだーーー！？

「そんなこと言つなんて酷いーーー。あれだけ私の体を弄んだのにーーー。あれは嘘だったのーーー」

何つー！ルルーシュ貴様ーーーー。いやいや今まで、落ち着け  
こーーになれ、笑顔だ。笑顔。

「ルルーシュちょっと話がある」

がしつとルルーシュの肩を掴む。きっと俺の顔には今、満面の笑み  
があることだらう。

「樂也ー！？までつー落ち着け。これは余興なんだ。痛つー！樂也、肩  
が、肩が！」

「余興だなんて！酷いわ！あなた！」

「楽奈も悪乗りするなーーー！」

「もつめちやくちやじやないか・・・」スザクー（兄）

「ふふふつ、でも樂しそうですよ兄様ー！」ナナリーー（妹）

「ワンワン・・・」 樂太ー（ペットの犬）

その後しばらくしてから3人に止められた。

ちらみに楽奈に「どー」で、その言ひ方知ったのか聞くと、出所は家の  
母親らしい。

母さん・・・年齢が一桁にいってない娘に、なに教えてるんだよ・・・

「おかれりなセーー。あなた、お風呂あらへ。」飯あらへ。

「ただこま、樂奈。」飯にじょうつかな

「おかえり、父さん」

「おかえりなセー、お父様！」

「ただいま

ルルーシュ的には、愚息と愛娘つてどうが。」  
田の俺といやつと俺の出番だな、

「それじゃあ、みんな席について

「「「「「こただきますー」「」「」「」「」「」」」

「」で俺参上ーー

「おーーてめえら何楽しんでんだ。今月の支払いまだなんですかび  
ーーー早く払つてもうえませんかね」

やつと出番になつた俺。役は・・・見ての通りの借りの借金取りである。

「今月の支払いは済ませたじや ないですかーー。」

「何言つてんの。昨日から利息が変わったんだよ～その分、取りに来たんだ」

「また、借金取り『A』」

『A』……俺名前ないの……

「その金が家の者が借りた金とするのなら、まず、借りた金の金額、印鑑を押された正式な書類、借りた金額の何%が利息となるのか言つてもうらおひつー！」

ちょ～アドリブ入れんな！そんなものあるわけない……おままでだぞ。

ルルーシュさつきの仕返しか！仕返しなんだな！！

いいだねつ、ならばこちらも役相応の対応しようではないか。

突つかつたがいいが、自分の言い分を正論で論破され悔し紛れに殴りかかるチンピラのようだ。んつ？

何か忘れてないか、俺？

「そんなことどうでもいい！金出せないなら、借金の片にお宅の奥さんと娘さん、連れてくだけだ！」

俺はルルーシュを押しのけて楽奈とナナリーに近づこうとする。だがそれを遮つて来る奴がいた

「二人には手出すな！」

スザクがいたの忘れてたー！てかも「う！」まやって引けねー・・・

「俺とやるのか？いいぜ表でろー」

「ああ！一人の男が私たちを取り合っているー罪な女だわ、私達ー！」

樂奈が母さんに毒されていく、いやこれはすでに毒されたと、言つたほうがいいのか。

「へ・どういー」とですか？お父様

「ナナリーはまだ知らなくていいよ」

結局、毎度同じくばらへり戦つた後に樂奈に止められて、おまえ」と終了になつた。



## 夏の約束

s.i.d.e.・樂也

夕食後、俺と家族はリビングに集まっている、俺と楽奈、楽太以外の表情がいつもと違ひ。

両親と婆ちゃんが、何か思いつめた様な感じだ、何か・・・って、日本とブリタニアの問題しかないか。

俺は、おやじく言われるだらう前に先に問いかけた。

「ねえ、どうしたの？父さん、母さん、婆ちゃん何か変だよ？」

父さん達は顔を伏せたが、すぐに父さんが俺の目を見て言つてきた。

「楽也、それに楽太、楽奈も聞いてくれ。」

「なに？」「？」

「家はここを引っ越すことになった。」

やつぱり、ここにこるのは危険だからだらう。ゲンブさん」注意でもされたのかな？

そう考へてみると、楽奈が声を張り上げた。

「何でーそんなのやだよー」「……」

楽奈と、後顔には出さないが、おそらく楽太も嫌がっている。それ

もやつだよな、俺だって、スザク達と離れるのは、嫌だ！ でも・。

「エリに居るととても危険なんだ、それに危険が過ぎればまた戻つて来れる、一時的なものだ。」

「それでも、やだよ！ スザクさんやナナリーちゃんと別れるなんて！」 「僕もやだよ…」「

「我僕を言つた！ これは、もう決まったことだ。変更は無い。」

そうこうと、父さんは席を立ち、寝室へ行つてしまつた。

「引っ越すのは一週間後よ。それまでに、お別れは済ませておきなさい」

母さんは両方の気持ちが理解できる。父さん達は、俺達のために言つてくれているのがわかるし、楽奈と楽太の方も、友達と別れるのは俺だって辛い

俺には両方の気持ちが理解できる。父さん達は、俺達のために言つてくれているのがわかるし、楽奈と楽太の方も、友達と別れるのは俺だって辛い

「なあ、婆ちゃん？」

「なんだい？」

婆ちゃんは、穏やかに俺に返してくれる。

「俺には、両方の気持ちがわかるんだ。俺だって、妹と弟は大事だ、何が何でも守りたい、だけど、友達も大事なんだ、別れたくないつ

て思ひ。どうすればいいのかな?」

婆ちゃんはしばりへ聞を空けた後言った。

「田を閉じて、深呼吸して、心を穏やかにして、目を開けたとき、思いの強い方はとればいい。わたしや、樂也が自分で決めた選択なら、何も言わないよ。」

俺はそれから外に出て、川原の近くまで来た。そして、そこで田を閉じた。・・・・

そこで俺は、大きく深呼吸し、それを数回繰り返した。

その後、田をお閉じて心を穏やかにする、

こづしていると、水の音がよく聞こえる。6人でよく聞いた音だ。風で草木同士が擦れる

音も、夏の虫が鳴いている音も、・・・・・

頭に思い浮かぶのは、6人との思い出、俺達6人がいつまでも続くことを願つた思い出。

今までのことを、思い出しては消し、思い出しては消し、そして最後に残つたのは・・・・

そうか、これが俺の願いか。ごめん。スザク、ルルーシュ、ナナリ

一、

俺が出した、答え、それは楽奈と楽太、家族の安全だつた。

部屋に帰ると、里奈と楽太はベッドに横になつていた、だが寝ているわけじゃないみたいだ。

「一人共起きてるか?」

「「・・・・」」

「引越し嫌か?」

「嫌だよ・・・」」

やつぱりそうだよな。

「一時的な物だよ、またここに戻つてこられるぞ。」

「でも、スザク達と合えないんだよー」「あえないのやだ……」

「俺だつて嫌さ、でも一生のお別れとかじゃないだろ。また会えるやつ。」

「「本当に?」」

「ああー。」

俺は、嘘をついた、はつきり言つて、会える確立などほとんど無い。ルルーシュ達もスザクもブリタニアの日本進攻をきっかけにして、ここを離れていく、その後のお互いの場は遠すぎる。確立は確かにあるが、会える確立が低い、そんなものを言つても嘘と同じだ。

「だから、今は我慢して、明日3人に、お別れを言いに行こう。」

楽奈と楽太は小さく頷いた。

…………翌日…………

翌日俺はスザク達に、引越しのことを話した。

「えー！引越しつて、どうこうことだよー！」

スザクはそういうて俺に詰め寄つてきた。ルルーシュは、何も言わない。こっち

の事情がわかつたんだろう。ナナリーはすぐ残念そうに、ひらりと見ている。

「引越しつて言つても一時的なものさ、じまいくしたら、戻つてくるよ」

そこで黙つていたルルーシュが口を開いた。

「ブリタニアのことか？」

やつぱり、わかってるか。

「さうだよ、」  
「ほづブリタニアが狙っているサクラダイト採掘所が  
近いからな。」

「また、ブリタニアか！？」

スザクがそう履き捨てるように言いつて、はつとした様にルルーシュ  
達の方を見た

「『めん！ルルーシュ達の』ことじやなくつてー。」

「わかつてるよ。それにブリタニアの悪口だつたら好きに言いつてい  
いよ、僕だつてブリタニアのことは大嫌いだー。」

「楽奈ちゃん達と別れてしまふんですか

「『めんね。ナナリーちゃんで、でもまたきっと使えるからー。』  
『会える……。』

「そういうことだし、それに引っ越しの準備あるから、俺達が遊べ  
るのは、後5日聞しかない、だからその5日間は、たくさん遊ぼう  
ぜー！」

それから俺達は遊んだ、とにかく遊んだ、今まで以上にいつも  
なら怒られる時間まで遊んだけど、親達も、事情を知っているから、  
多田に見てくれた。

…………、「越し当田…………」

スザク達が見送りに着てくれた。これで、おそらく6人で会つのは最後になるだろう。

父さんに許可を貰つて、時間を貰つた。

無言、みんな黙つてしまい何も言わない。けど、この空気が嫌いな奴がいるから大丈夫だろう。

すでに「はず」してるのがわかる。

「頑張れよー！」向こうに行つても、元氣でな。」

やつぱり、こんなしけた最後は俺達じゃない！

「おう！スザクだつて、俺達がいないからつて泣くなよ

「誰が泣くか……」

「そうだな、スザクは時々涙もろいからな

ルルーシュがニヤッと笑つて言った。

「なんだと……」

スザクがむきになつてゐる。いつものことだが。

「ふふふ、皆さんお元氣で！」

ナナリーは微笑みながら言った。

「ナナリーちゃんもね!」「ルルーシュとスザクも……」

「ああ、この体力バカに振り回せられるだろ?が、頑張るさ」

「ルルーシュが弱つちいんだろ?が!まあとつあえず、楽太も元気でな!」

「おう!後、ルルーシュちょっとといいか?」

「なんだ?」

「俺は楽奈と楽太を守る、だからお前は、」

「わかつて、僕はナナリーを守るよ、」

「おい、俺もナナリーを守るんだからな、」

「お兄様、スザクさん」「お兄ちゃん」…

「もちろん、スザクにも守つてもうつもつせ、」

「・・・そろそろ、時間だな、じゃあ最後にまた会えるように、約束しよ?ぜー!」

確立はないが、また4人が会えることを願つて。

俺達は6人で円を作るよつに指を繋ぎ、約束の言葉を口にする。

「 「 「 「 「 指きつけんまん! 嘘ついたら針千本飲りますー・指切つたー」 「 「 「 「

再開を約束し笑い合つた口から数日後、ブリタニアは日本に侵攻し、日本はエリア11、と名前を変えられた。

S·i·d·e · 楽也END

約束している場所より少し離れた木の上

s·i·d·e · 牧宗吾

ん~、としあえず、これで幼少期の話は終わりですかね。

家族を取つた主人公君は、一体これからどうなつていくのか・・・ふふふふ。

原作キャラとも親友になつていますし、7年後は、一体どうな話になることやひ。

ハッピーハンド? バッドエンド?

再開できるのか。それともただの一市民として死んでしまって、不完全燃焼になるか。

「これにしろ、その時までは・・・

「暇ですね～」

side 牧宗吾

## 夏の約束（後書き）

幼少期終了です。これから大分時間が進みます。

それぞれの思い（前書き）

閑話みたいなものです。

## それぞれの思い

‥‥‥2015年8月‥‥‥

side・樂也

あの日、スザク達と別れてから数日後にブリタニアが日本に侵攻した。その結果、日本はサクラダイトの採掘源も、文化も、人権も、土地も、そして、名前を奪われた。

ブリタニアによって植民地になった日本は『エリア11』と名前を変えられた。

幸いにも、俺達の移り住んだ場所には、ブリタニアの攻撃の手はこなかつた。

今はブリタニアの侵攻から、5年経つた。

戦後1年間は、戦後の日本に多くのブリタニア人がやつてきた。この町にも、ブリタニア人が、我が物顔で闊歩していて。俺達日本人は毎日ブリタニア人のご機嫌を取りながらの生活を送っている。

生活も人も変わった。

住んでいる所は京都よりそこそこ離れた場所のゲットー。

家は前の家より狭いし古ぼけてる、けど今の『時世家』があるだけでもいいほうだ。

父さんは農家ではなく戦争により破壊された地域の復興作業をして

俺もそれを手伝っている。

母さんも婆ちゃんも内職をいくつか、その手伝いを楽奈と楽太もしている。

俺は坊主頭ではなくなった。今は、ワックスで立たせたようにボサボサの髪型だ。

そして、何より、家族で笑い合つことが、わかりすぎるほど少なくなった。

俺と父さんは、仕事を終えて帰路についていた、その途中、人だかりができていた所があった。

覗いてみると、そこには数人のブリタニア人とそのブリタニア人に必死に謝っている一人の日本人男性がいた。

周りの日本人に訳を聞くと、何でもあの日本人が、ブリタニアの悪口を言っているのをブリタニア人が聞いたらしい。

迂闊な人だと思う。ここは、確かにブリタニア人が住む租界からは離れてはいるが、

ブリタニア人が居ないわけじゃないのに、近くを見ると酒の瓶が転がっている。

それもブリタニア人が飲むワインなんかじゃなく、日本酒だ。酔つておもわず言ってしまったんだろう。

「こべぞ、 楽也」

「わかった」

助けることなんてできない、助けてしまつたら今度は自分の番だ  
、やつしるなんてもつてのほか、その翌日は仲間を引き連れて来て、袋にされるだけだ。

だから誰もが黙つて見ている。しようがない、お氣の毒に、かわい  
そうに、そう思いながらも、何もしない。

俺と父さんが背を向けてすぐ後に、鈍器で殴つたよつた音と男性の  
悲鳴が聞こえた。

「「ただいま」」

「お帰り、お兄ちゃんーお父さんー」「おかえり…」

「おかえりなセー、あなた、楽也」「お帰り」

母さんと、姫ちゃんの顔には安心感が伺える。心配してくれたんだ  
わい

楽奈と楽太は変わらない、多くの日本人が生きる氣力を失う中、家  
の中では変わらない笑顔で迎えてくれる。

夜、俺達兄弟妹はみを寄せ合つて寝ている。

俺は真ん中で両脇に楽奈と楽太だ、一人ともずっと俺に抱きついて眠っている。

以前にもこんなことはあつたが、毎日ではなかつた。

おそらく一人とも不安なんだろう。俺だつて怖い、でも、怖がつてばかり入られない、

俺は兄ちゃんだからな。お前達を守つてやる、絶対に死なせるもんか！

そういうえば、ルルーシュ達とスザクは大丈夫だらうか？

アニメビデオなら生きているだろう、だがこれは現実で何が起こるかわからない、

最悪3人とも・・・やめやめー不吉な」と考えるな！

生きててくれよ、3人共・・・。

俺の視線は、自然と窓から見える夜空に向く。

同じ空の下に居るんだろうルルーシュ、スザク、ナナリー、俺は家族を守りきつてみせる！だからまた会おう。あの日の約束を果たそう！

そこには依然居た場所より綺麗で沢山の星が見えていた。

### Side・ルルーシュ

俺とナナリーは今、アッシュフォード学園にいる。5年前、戦後の夕焼けの仲で

ブリタニアをぶっ壊す、と誓いスザクと別れた後に保護され、今、俺はルルーシュ・ランペルージ、ナナリーはナナリー・ランペルージと名乗っている。この学園に来て正直よかつた。

アッシュフォード家は、俺達のことを、自分達の地位のための保険と考えているだろうが、ここに来れたおかげ、ナナリーの笑顔を失くさずについた。

来た当初は笑顔が無かつたナナリーは今では学友にも恵まれ、よい学園生活をおくれている。

俺自身も、最初は笑顔が無かつたが、今ではナナリーの前では驕りなく笑えていると思う。

昔、ナナリーが居なくなつた時の教訓だな、あれがなければ、おそらく今でも俺とナナリーは笑つていなかつた。

「お兄様」

咲世子さんに連れられたナナリーが来た。

「なんだい。ナナリー？」

話を聞くと、咲世子ちゃんに日本の遊びについて教えてもらひてたら  
しー。

「・・・ それで重ねた円筒を氣の槌で倒さず打ち抜いてい  
く遊びなんです！」

日本の遊び、よくあいつらに教えてもらひたな、スザクはおそらく  
無事だらうが、

樂也達はわからない、無事で居るといいんだが、あいつの引っ越し  
た先では直接的な戦争被害がなかつたはずだが、百聞は一見にしか  
ずといつ言葉もあるが。

自分で見ない」とには確信できない。・・・・・・・

「・・兄・セ・・・」

樂也の妹と弟である樂奈と樂太も妹を持つ兄として心配だ、・・・

・

「お兄様！」

！…考えに没頭していたようだ。

「な、なんだい？」

「先ほどから、呼んでましたよ？」

「なんでもないよ、ナナリー」

「いえ、お兄様のその顔は、スザクさんや楽也さんを考へていてる顔です」

「……ふ、観念するよ、その通りだ」

「彼らを心配してるのはお兄様だけじゃないんですよ」

「「めん、ナナリー」

「皆せん、無事でしようか?」

ナナリーが落ち込んだように言ひつ。

「わからない、スザクは生きているとは思つ。京都六家あたりに保護されているだろう。

だが楽也達は、まったくわからない、名譽ブリタニア人になつているか、それともどこかのゲットーにいるか、いづれにしても確信が持てないからわからない」

「あの時の約束、早く果たせるといいですね」

約束、神崎家の引越す時にした 6人の再会を約束した誓い。

「そうだね、ナナリー、破つてしまつと針を千本飲まなければいけないからね」

そんな冗談を言つて俺はナナリーに笑いかける。

ナナリーが寝付いてから、自分の部屋に戻り、窓から外を見る。

そこに見えるのは、アッシュフォード学園の敷地と夜の空、その空を見上げながら思い浮かべるのは、

あの暑い夏の日の思い出、俺達6人がまだ子供で居られた時間、スザク達と友達となり、

山で、池で、そしてあの土蔵で遊んだ記憶、

ブリタニアに捨てられた俺とナナリーがやっと手に入れた小さくだが幸せな世界、

だが、それすらも奪われた、ブリタニアに！だから！

「俺は再度誓おう」

ナナリーの目と足を奪い、俺達を捨て、スザクと楽也、楽奈、楽太との、俺達がたどり着いた小さい世界をも奪い、今も生命を脅かすあの国を！絶！対！に！ぶつ壊す！

見上げた空には、星も月も見えず、ただ漆黒の夜空があるだけだった。

Side・ルルーシュEND

Side・スザク

僕は今、軍に在籍している。ルルーシュと別れて総司令部に向かつた、そこで数年過ごした後、僕は名誉ブリタニア人になり、軍に入つた。

ブリタニア人からも名誉でない日本人からも、罵られるが、…  
僕にはそれがお似合いだ。

父親は殺して、自分の行動で、死ななくてもいい人も死なせてしまつた僕には。

ルルーシュ、ナナリー、楽也、楽奈、楽太、君たちは今の俺を見たらなんていうだろうか。

僕がしてしまったことを、知つたらなんていうだろうか。

それに、楽也達は無事なのか。僕のしたことのせいで死んでしまつていたら・・・

ルルーシュはおそらく無事だ。今はアッシュフォードに居るはず。

だが、楽也達はわからない。同じ名誉ブリタニア人に聞いてみたり、休みの日には自分の足で探したりしたけど手がかりは無かつた。

樂也、君達は一体今どこに居るんだ？生きているのか？それとも…  
・死んでしまつていたら僕は君にどう謝ればいい？

出撃の時間だ、今は任務に集中しよう。

『準備はいいか！猿ども！今回の任務は、総督の足元でひりひりする鼠退治だ！猿が鼠に負けるんじゃねーぞ！』

「Yes, My Lord」

そういうて、空になび田もくれず、出撃する。

その空は、延々と続くドス黒い雲で覆われていた。

side・ズザクEND

これより、数年のときを経て、植民地である日本にとって、希望となるものが現れる。  
誓う者、千悔するもの。

その名は“ゼロ”。

そのものは、クロ、ヴィス・ラ・ブリタニアを殺害し

その後、黒の騎士団を設立。数々の成果を挙げ、行政特区日本の会場で日本人を虐殺したユーフェミア・

リ・ブリタニアを殺し、合衆国日本の、設立を宣言

後に、ブラックリベリオンと呼ばれる事件を引き起こす。

ブラッククリベリオンで、ゼロはコーフュニア皇女の元騎士である枢木スザクによって捕縛され、その後、処刑されたと発表された。黒の騎士団幹部も捕縛され、この事件は收拾されていった。

## 再会

side・楽也

6人で再開を誓つてからもう7年になる。俺は、ルルーシュに協力することも、スザクに協力することもしなかった。

俺は引越しの前に、家族を守ると決めたんだ。友達よりも家族を取つた。謝りはしないし後悔もしていない。

この7年間、俺の持つているナイトメアを使う場面はなかつた。

だがギアスの方は、何回も使つた。家族がブリタニア人のいざこざに巻き込まれた時、

里奈や楽太と逸れた時、家族に危険を及ぼそとした奴を叩きのめす時などなど、

家族のことを、ギアスを使って助けたりする時は、心苦しいが気絶させた。

危険な奴を叩きのめす時は、高速でぶん殴つた。いずれも人の目に付かないように細心の注意を払つてやつた。

ゼロ、おそらくルルーシュによる反逆、ブラックリベリオンが終わつたのが一年前、

日本人の生活はさらに厳しくなつた。ブリタニアの政策による圧政、ブリタニア人による暴力、罵倒、俺がギアスを使う回数も自然と増

えた。

俺達家族にも変化があった。

それは家族を養うために、名誉ブリタニア人になろう、という父さんの意見から始まり俺もそれに賛同した。そして俺と父さんは試験を受けて名誉ブリタニア人になった。

名譽ブリタニア人になつてからは、俺達は確かに以前よりはましな生活が出来ているが、

はつきり言って、まじってだけだ、ブリタニア人から毎日のように罵倒されて、

理不尽に物を言われる。もう何回意味もなく謝ったかもわからない。

ゲットーに帰れば日本人にも白い目で見られる。語り合えるのは同じ名譽ブリタニア人とその家族とだけだ。

楽太は忙しい俺の代わりかどうかはわからないが、腕つ節は強くなつた。

俺が租界に言つていてるときは家族を守ってくれている。

女性陣は、あまり変わっていない。俺や父さんや楽太が帰つてくると、いつも笑つて迎えてくれる。

今はたまらなくそれがうれしい。

その生活を送っている中で今、俺は仕事の休憩時間に租界のビルに映し出された映像を見ている。

移っているのは、黒のマントを纏い、同じく黒のフルフェイス型の仮面をした人その名は、ゼロ。

原作でいう第一期が始まった。

俺は放送の後に、いつも通り仕事を終わらせて、家に帰った。

「お帰り！ 楽也」

家に帰るといつもより少し、明るく母さん達がお帰りと言つてきた。どうしたのか聞いてみると、昼間あつた放送のことらしい。

俺の家族は、楽奈と楽太以外スザクのことも少なからず思つてはいるが、それでもセロの方に希望を寄せている。自分達の希望が帰ってきたんだからうれしいだろう。

それに対して楽奈と楽太は複雑な気持ちみたいだな。ゼロを捕まえたのはスザクだ、俺達にとっては幼馴染であり親友。スザクがランズに昇格したことも喜んでいたが、ゼロがいなくなつたことも残念がっていた。

「兄ちゃん、あのゼロ本物だと思つ？……」

「さあな、本物であつて欲しいと思つ。だけどゼロは仮面を被つてゐるからな、そもそも本物かどうかなんて、側近の人ぐらいしかわからへしないさ」

おそらく、その内、ブリタニア本国からスザクが来るだろ。ルルーシュかどうかは知らないがゼロが現れたとなれば、あいつが来ないはずがない。自分の主君をゼロに殺されたあいつが。

S i d e . . 楽也 END

: . . . . 数日後 : . . . .

s i d e . . 楽也

ゼロ復活宣言から日本全体が慌しくなった。

その数日後、黒の騎士団はゼロの作戦により救出され、日本人はゼロと黒の騎士団の復活を喜び、ブリタニア人はゼロが本物かどうか考察し、ブリタニア軍人は軍備を強化して、ゼロと黒の騎士団を警戒している。

そんなある日、俺はいつも通りに仕事を終え、帰ろうとした時に後ろから呼び止められた。

振り向くとそこにはつい先日もテレビに映っていた幼馴染が変装して立っていた。

「久しぶりだね」

「スザク・・・」

俺達はそれから、人がいない租界やゲットーが見渡せる場所へと移動した。

「7年ぶりだね、楽也」

「お久しぶりですね。枢木卿」

一応、階級でいえば俺にとつて雲の上の存在なので、敬語を使いつ。

「そんな、堅苦しい言い方しないでもいいよ」

「どうやら、この話方はお気に召さないらしい。そりゃそうだ、俺だって嫌だしな。

「じゃあ、改めて、久しぶりだな、スザク。だがどうして俺の場所がわかつたんだ?」

「僕がまだ名誉ブリタニア人だった頃からずっと探してたんだ。楽也は数ヶ月前に名誉ブリタニア人になつただろう。其のリストを見つけて見つけたんだ。」

「なるほど、名誉ブリタニア人はゲットーの人と違い、ある程度自由も権利もある。」

その仲には当然戸籍もある。それを見たのか。

だけど、よく来れたな、こじはトウキョウ租界からは結構遠いゲットーなんだが、

まあ懇々会いに来てくれたのはうれしいけどな。

「楽也是今まで何があつたんだい？」

「そういわれて俺は自分がこれまでのことを話す。引っ越ししてから、何があつたか、

名譽になつた理由とか、当然、ギアスやナイトメアのことは伏せて。

「そつが、そつちも大変だつたんだね。」

「お前はどうだつたんだ？今まで何があつた？」

俺も知りたい。お前が今までどうやって生きてきたかを。

「僕は・・・・」

「・・・・だつたよ、そして今はラウンズにまで上つ詰めた。」

スザクの話が終わつた。

スザクはゲンブさんのことは言わず軍に入つてから話した。そしてゼロのことになると人が変わつたように憎しみを込めて言つていた。まあ当然か

「そつか。」

俺には言える言葉が見つからない。『大変だったな』？『辛かつたな』？いえるわけがない。

俺にはユーフェニア皇女を助けることはできた、だがしなかった。

俺はもう家族を守ると決めたから、そんな俺に皇女殿下のことを悲しそうに、悔しそうにいつたスザクに言える言葉はない。いつてどうする？

「楽太と楽奈は、元気かい？」

「元気元気、あいつらの笑顔は昔と変わらないよ。ただ、楽太は腕つ節が強くなつたな！」

俺と同じで家族を守るつて頑張つてる」

「家族を守る・・・か」

スザクはそついつて顔を伏せた。

「家族つていえば、ルルーシュとナナリーはどこで何してるか知らないか？」

「……ナナリーは、一年前までいた学園を出て今本国に戻つてる、皇族にも復帰して、何日かすれば日本の新しい総督に就任するんだ。ルルーシュは皇帝の命令で今もその学園にいるんだ。」

スザクはそう言った。それにしても、随分表情を隠すのがうまくなつたな。

真実を知らなければ騙されてたぞ。

「ナナリーが！そつか戻つたんだな。それにしても見つかっちまつ

たんだな。ルルーシュとナナリーは離れ離れか・・・でもナナリ一が総督か、今までの奴よりはマシになるだろうが、大丈夫なのか、目が不自由なナナリーに政務が出来るとは思わないが

「僕が補佐をするよ。心配ない。」

「そう言つが、お前がいない時はどうするんだ。」

「お目付け役の人人がいるから。」

確かにお目付け役のローマイアは差別意識が強い奴だったその人とナナリ一じゃ、うまく出来ないとと思うが。

「それに同じ日本にいるけど一人が会うのは、きっとダメなんだろう?」

「そうだね、一応僕だけが、二人に会えるけど」

そうか、そう言って俺はルルーシュ達の話をそこまでにして次の話に行く

「なあ、スザクってゼロを捕まえたんだよな?」

「あ、ああ」

「今のゼロって偽者か?確かに処刑されたっていってたし」

「・・・それは、わからないよ、でも確かなのはゼロを捕まえて、僕は今の地位に着いた。それだけさ」

「なあ、スザクに頼みごとがあるんだ」

「なんだい？」

「俺にだけ内緒でゼロの正体、教えてくれない？」「俺は冗談交じりにおしゃらけて言つ。スザクは困つたよう言つてきた

「知つちゃうと、樂也を捕まえなくちゃならなくなるよ」「あ～怖い怖い。なれいいや、今になしつてことで」

「そうのがいいよ

スザクは笑いながら言つた。その時、  
ピピッ

携帯がなつた、スザクのだ。俺達名誉ブリタニア人は持つことを許可されてないからな。

「つと、ゴメンちょっと……なんだ？……わかつた」「樂也悪いけど、」

「わかつてる、仕事だろ、頑張つてこいよー」

「ありがとう。樂也。久しぶりに会えてよかつた」

「俺もだ。今度は6人で集まるといいな！」

「そう・・・だね、それじゃ」

そういうつてスザクは駆けていく、最後の言葉言つた時、何ともいえ

ないような顔だつたな

願望、後悔、怒り、悲しみ、いろいろ混ざつてた。

「さて、俺も帰るかな」

里奈と楽太にスザクと会つたこと言つてみるか。きっと驚くな！  
よし！ なら、さつと帰りますか！

Side・・・樂也END

Side・・・スザク

僕は帰りのへりの中で考える。思つことはせつとき樂也が言つたことだ。

『今度は6人で集まれるといいなー。』

その言葉を聞いた時、僕ははつきりと答えを返せなかつた。

確かに、確立は少ないが会つことは出来るかもしない。だけど昔  
みたいな気持ちで会つのはもう無理だろう。

僕はゼロを捕まえて皇帝に差し出した。ゼロだったルルーシュを。

僕はルルーシュが許せないユフィに、ギアスを使って殺したあいつを。

もつすでに僕とルルーシュとの間に友情はない。僕がアッシュ・フオードに行つてまだ少ししか立つてないが、おそらくルルーシュは記

憶が戻つてゐる。

今の僕たちにあるのは、ただの友達<sup>ごくつこ</sup>。ルルーシュはボロを出さないように演技し、僕はルルーシュにボロを出させようと演技する。

樂也、僕は君がうりやましい。昔のままで入れる君が。

S.i.d.e.・スザクEND

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7471q/>

---

トリップ・ライター

2011年10月8日17時45分発行